

国民の幸せを 国づくりの中心に

西水美恵子氏

(元世界銀行副総裁、
ソフィアバンク・パートナー)

聞き手 編集主幹・根津義明

両親と祖父に教えられた 自立精神

——西水さんは大阪で生まれて北海道で育ち、中学三年生のときに上京して、都立西高一年生の冬に、東京と姉妹都市だったニューヨークで高校生親善大使として一カ月ほど過ごしました。三年生の夏に再び渡米し、フィラデルフィアの高校に留学されたのですが、なぜアメリカだったのですか。

西水 初めてアメリカに行ったとき、私の心に強く印象に残ったのは「アメリカの自由さ」でした。たとえばアメリカ人が思ったことをはつきり言うこと、特に女性がもの怖じしないで堂々と自分の主張をすることに驚かされました。レブロン化粧品社の社長さんのお宅にホームステイをさせていただいたので

すが、奥さんはNGOの活動もなさっていて、ご主人と対等の人間関係を持ち、いっしょに家庭を運営されていました。その姿をつぶさに見て、「ああ、こういうところだったら、女の私ももっと自由に羽ばたけるのではないか」と思ったのです。そして日本に帰る飛行機の中で、日本を脱出しようという思いが、ぼんやりとですけれども、頭をもたげてきたのです。

——その頃の日本はまだ男性中心に回っていたのですね。

西水 今でもそうじゃないですか、何をおっしゃる（笑）。当時はもつとひどかった。私が入った都立西高は非常に自由な、今でも行ってよかったと思う学校ですが、一学年が男子三百人、女子百人で、男子の多くは東大に進み、将来はこういう仕事をしたという明確な志望、計画を持っていました。ところが

が女子は、成績さえよければ東大でもどこでも行けますが、そこまでが男女平等で、そのあとが絶壁なのです。男性に比べ女性の職場は限られていますし、結婚をして仕事を続けようと思えば、仕事と家庭を両立させるために、自由が束縛される感じを強く持っていました。「女も手に職をつけなければならぬ」というのが母の方針で、「自分のことは自分でしなさい」といつも私と妹に言っていました。両親と、海軍軍人だった祖父に教えられたのは自立精神だと思いますが、それがアメリカに家出をしちゃったのですね。

——高校卒業後に進んだ女子大のガウチャ―大学で経済学を学んだのはなぜですか。

西水 西高の数学のレベルは高く、大学でも数学が得意だったので数学を専攻しようと思っていたのですが、社会科学も一科目とらなると卒業できない。私は英語が下手だったので、多くの文献を読まされる政治学や歴史は無理だと困っていたら、クラスメートが「経済学なら読む文献も少ないし、ミエコやつたら」と勧めてくれたのです。経済学は、エコノミック・アニマルとしての人間の行動を分析して行政に役立てる学問ですが、人間のことでですからなじみやすいし、学んだことが政策に直結してすぐに役立つ。得意の数学も活かせるということで、経済学に惚れ込んでしまったのです。私はそれまで逃げてばかりいて、経済学を選んだ動機もそうですが、このときは逃げた結果がよかったのですね。

ナディアと出会い 貧困との戦いを決める

——大学の研究者から、世界銀行という実業の世界に転じたのはなぜですか。

西水 世界銀行の当時のチーフ・エコノミストで、開発政策と研究所を担当していた著名な経済学者のホリス・チェネリー副総裁に私が書いた生産性の論文についてセミナーを開いてほしいと依頼されたのがきっかけです。

世界銀行の本部はワシントンにあります。その研究所で行ったセミナーは、私がそれまで研究発表をした中で最も手応えのあるものでした。なぜかと言うと、私の論文の内容を「どうすれば、一つの国のよい経済政策をつくるために、具体的に使っていただけるだろうか」という観点からの、私にとっても興味深い質問ばかりだったからです。そのセミナーの終了後、夏から始まるサバティカル（研究休暇）の一年を世銀の研究所で過ごさないと誘われたのです。

私はそれまで経済開発の勉強をしていないし、興味もなかったのですが、一年間何を研究してもいいと言われる待遇もよかったのでお世話になることにしました。そのときに出された一つの条件が、「一国でもいいから発展途上国の実情を見てきてください」ということでした。それならエジプトがいいと、プリンストンの修士課程を終えて世銀で活躍し

ていた教え子が誘ってくれて、彼が率いる開発五カ年計画調査団に同行して首都カイロに行きました。そこでナディアに会ったのです。——ナディアというのは。

西水 女の子です。カイロ郊外に「死人の町」という貧民街があります。邸宅のような豪華な霊廟れいびやうが並ぶイスラムの墓地に、行きどころのない人々が住み着いた場所ですが、週末のある日、ふと思いついてこの町に足を運び、ナディアに出会ったのです。ナディアは病気で、母親から私が抱き取ったとたん、あまりの軽さに驚きました。急いで医者を手配したのですが、間に合わず、ナディアは私に抱かれたまま亡くなりました。死因は下痢からくる脱水症状でした。安全な飲み水と、しっかりとした衛生教育さえあれば防げた病気が

です。糖分と塩分を溶かすだけの誰でも簡単に作れる飲料水で応急手当ができたのです。

私はそれまで恵まれた環境に育ちましたし、自分の腕の中で幼い子が死ぬという体験などしたことがないので、ショックどころの騒ぎではなかったのです。誰の神様でもいいからぶん殴りたかった。天を仰いで涙を流し、辺りを見回した瞬間、ナディアを殺した化け物が見えたと思えました。そこには最先端の技術と、優秀な才能と、膨大な富が溢れる都会があった。悪統治。民の苦しきなど気にもかけない為政者の仕業だと直感したのです。

この体験から、私は貧困と戦う世銀に残ることを決めました。私はそれまでいつも逃げばかりでしたが、ナディアと会って、自分に正直に生きること、逃げるな、卑怯者



PROFILE 西水美恵子（にしみず・みえこ）氏

1948年、大阪府に生まれ、北海道で育つ。東京都立西高校在学中に高校生親善大使としてニューヨーク訪問。3年生の夏にフィラデルフィアの高校に留学し、卒業後、ガウチャー大学で経済学を学ぶ。75年、ジョンズ・ホプキンス大学大学院博士課程修了後、プリンストン大学助教授に就任。80年、世界銀行入行。開発政策局、産業・エネルギー局、南アジア地域局長などを経て、97年、日本女性初の副総裁（南アジア担当）に就任。2003年、世界銀行退職。07年よりシンクタンク・ソフィアバンクのパートナー。現在、ワシントンと英国領バージン諸島に在住。著書に『国をつくるという仕事』などがある。（<http://www.sophiabank.co.jp/> 参照）（撮影：鈴木慶子）

になるなという信念が出てきたのではないかと思います。ナディアはその後、私の思考と行動のものさしになり、何をしても、ナディアが生きていたら喜んでくれるかしらと問いかけるのが習慣になりました。ナディアによって、本気の力というものに気づかされ、何でも本気でぶち当たっていけば、それ自身が解決の九九パーセントなのだということも学ばせてもらったと思っています。

女性を解放しなければ 経済開発は速くならない

——世界銀行は第一次世界大戦から第二次世界大戦に至る歴史を繰り返してはならないという当時のリーダーたちの信念から、姉妹機関のIMF（国際通貨基金）とともに設立されました。経済学者のケインズが設立に尽力したことで知られますが、世界銀行の役割は何なのですか。

西水 世界銀行の使命は貧困のない世界をつくることで、加盟国は現在、百八十四カ国です。世界銀行という援助機関だと思われている方が多いのですが、違うのです。人様の

大切なお金を預かって運営し、いろいろなリースを管理しながら業務成績をあげ、運営経費を捻出して、返すお金は約束どおりに返済する。つまり真正正銘の金融業なのです。日本でも「世銀債」の名で知られる債券などを通じて市場から安く借り、市場信用がないに等しい発展途上国のよい国づくりのために、できるだけ安く貸すことに専念するのです。

ただ世界銀行の第一の仕事は融資よりもむしろ知識の提供です。世界中のさまざまな国の政策を吟味し、間違ったところやよいところを指摘したり、知識やノウハウを提供したりするので。国際法上、世界銀行の株主は加盟国の国民ですから、融資国の政府が国民にとって悪いことをしたら、「うちの株主に何をやるんですか」と言って、融資を停止することもあるのですよ。

——世界銀行は今、女性解放に力を入れているそうですが、なぜですか。

西水 世界銀行も歴史を積み重ねるうちに、開発に対するものの考え方が変わってきて、女性を解放しなければ経済開発の速度が速くならないことを学んだのです。たとえば貧しい国の村とかスラムに行きますと、女性を一

つの階級と見えています。つまり、動物と一緒にだというような考え方です。そこで彼女たちの中に入り、自分たちの頭で自発的に考えてよいということ、仲間の女性たちと力を合わせることで生活程度を上げられることをアドバイスするのです。その一環として、女性に読み書きを教える。女性たちは一年ぐらいで読み書きをマスターします。すると、酔っぱらって帰ってきていた夫が暴力を振るわなくなる。子供たちに勉強を教えられるので尊敬され、家庭内も平和になる。それと並行して、村の女衆が話し合い、鶏を飼って卵を売り現金収入を得るといった共済事業を始める。そこから村ががらりと変わっていくのです。

——途上国の成長につながる融資を行うには、ニーズの確かな把握が必要ですね。

西水 私は南アジア局の融資判断の責任者である営業局長に就任したとき、世界銀行の株主でありお客様である貧しい人たちの実情を理解できているのだろうかとの思いから、パキスタンの貧しい村に数週間ホームステイをさせてもらいました。現地に行くと、その家のお母さんは毎日水汲みに六時間費やしていました。その村は高地の中腹にあり、水源は山の頂上近くに湧く泉一カ所だけなので、朝起きると片道一時間かけて山を登り、水を汲み、重い桶を背負って降りてきて、朝ご飯の用意をする。その水汲みを一日最低三回繰り返すのです。私も、お母さんにくっついて一日三回の上り下りを経験しました。お母さん

日本人は今、精神的にも物質的にも豊かな国を求めている。それこそ東日本大震災後の青写真とすべき、未来の日本の姿だと思います。

の睡眠時間は四時間あればよい方です。そこに水道を引けばお母さんの水汲みの六時間が浮くわけです。その浮いた時間をどう使うかこの辺りから考えないといよい仕事にはなりません。私は、お母さんの苦勞を間近で見、自分も体験して初めて、生身の人間として貧困を考えるようになりました。それ以後、担当する国の貧しい村に一週間ほど滞在し、その経験をベースに仕事をしました。頭と心をつなげて行動するようにしたのです。

真の幸福実現を目指した ブータンの雷龍王四世

——西水さんは「国民総生産より国民総幸福の方が大切だ」と言ったブータンの前国王、雷龍王四世を恩師と呼んでいますね。

西水 ブータンはヒマラヤ密教を国教とする仏教国で、人口は六十七万人です。三、四十年前までは車道もなく、電気も水道もない自給自足の中世経済的な国でしたが、今日では近代国家の形を成し、一人当たりの国民所得は南アジアで二位となるまでの成長を遂げました。それを実現したリーダーが、前国王のジグミ・シンゲ・ワンチュク雷龍王四世です。ブータンの民主化改革に着手した父君の雷龍王三世の急逝後、十六歳で即位した雷龍王四世は、野宿までして国中を歩き国民の声を聞きました。その中で、「国の安寧あんねいをもたらすのは国民の幸福だ」ということを学び、国民



の幸せを高めることを国づくりの中心に据えたのです。ブータンが一九九九年に発表した「ブータン二〇二〇」という国家ビジョンは、自然環境や文化伝統を破壊し、家族や友人、地域社会の絆を犠牲にするような経済成長は追求せず、人が安らかに住む国をつくることを宣言しています。その結果、ブータンでは国民の九七パーセントが幸福と感じています。「国民総生産より国民総幸福の方が大切だ」と言った前国王の意図は、国民の幸せを中心に据えて国を治めるのが常識で、経済成長は幸福を実現する手段である。手段と目的を取り違えてはいけないということです。私は、「アジアの奇跡」といわれた日本の戦後復興は悪例だと思っています。なぜなら、復興の目的は豊かな国民生活で、経済成長はその手段の一つだったはずですが、経済成長そ

のものが国政の目標になり、精神的な豊かさとのバランスを失ってしまったからです。でも日本人は、お金とものだけでは真の豊かさは得られないことに気づき、精神的にも物質的にも豊かな国を求めている。自然と伝統文化とともに生き、人間的な絆がある、安心できる社会で暮らしたいと多くの国民が望んでいます。それこそ東日本大震災後の青写真とすべき、未来の日本の姿だと思います。

——日本にその実現は可能でしょうか。
西水 可能です。すでにその動きは地方から始まっていると思います。日本にはブータンにはない宝があるのです。それは企業、なかでも中小企業です。ベストセラーの『日本ではいかに大切にしたい会社』に出てくるような経営者が全国至る所において、優れた経営理念を持ち、ものづくりと人づくりの両方を大事にしながら、従業員と地域を大切にしながら、自分たちの努力で幸福を実現しようとしている。それはブータン国王が行ったことと同じです。全国の中小企業がそういう会社になれば日本はものすごい国になります。日本人がいま望んでいる国になる可能性は十分あり、私は思っているのですよ。

——中小企業経営者に温かな応援をいただきました。本日はありがとうございました。